

新型コロナウイルスの「インフオデミック」

唐木英明氏（東京大学名誉教授）が8月31日付の朝日新聞デジタルの「論座」に「新型コロナウイルスは『恐怖の感染症』ではない」という論文を投稿している。新型コロナウイルスにまつわる現在の混乱の原因は政府が「2月1日に新型コロナウイルスをずっと重大な感染症と判断し、2類相当とした」ことに起因しているという。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

安倍総理は8月28日の辞任表明会見の冒頭にあえて「新型コロナウイルス対策の変更」を表明した。自らの政権が新型コロナウイルスによる感染症を感染症法の「指定感染症」とし、危険性が2番目に高いグループである「2類相当」として扱ってきたことを変更すると述べたのだ。我が国だけでなく、世界中の国が新型コロナウイルスウィルス感染症を過剰に高リスクの感染症と定めて現在の混乱をもたらしている。

実は、東京都医師会の感染症危機管理対策協議会は2月13日に次のようにまとめている。
「新型コロナウイルス感染症の感染力、重症度、診断、治療について感染力はインフルエンザと同程度かそれより弱いと言われています。重症

度は、通常のインフルエンザなどと同程度と予想されます。予防方法も標準的な感染症予防策で十分と言われています」

さらに唐木氏は、「WHOは2月2日の報告において、新型コロナウイルスは真偽を取り混ぜた情報の氾濫を引き起こし、人々ほどの情報が正しいのか判断ができなくなっていると述べた。そしてこの現象を、インフォメーション（情報）とパンデミック（世界的感染症流行）の二つの言葉を合わせて『インフオデミック』と呼んだ。すなわち『世界的情報感染』であり、世界はこれに感染したのだ」という。

唐木氏は、「もともと5類に分類されている季節性インフルエンザと同等の感染症であり、これを2類として扱ってきたことには二つの重大な誤りがあった。それは『リスクの大きさに対応したリスク管理を行う』というリスクの公平原則と、『リスク管理が生み出す別のリスクに十分配慮する』というリスク最適化の原則に反していた点である」と述べている。

8月30日の時点で、新型コロナウイルスのリスク評価を唐木氏は「日本ではイ

ンフルは冬季に集中し、感染者は年間に約1000万人、関連死を含む死者が約1万人発生している。一方、新型コロナウイルスは夏季にも発生し、その確定感染者は6万7000人弱、死者は1300人弱である」とし、東京都医師会の見解はいま見ても間違いはなく、新型コロナウイルスは当初から5類相当にすべきであったということになると述べている。

詳しくは、論座の唐木氏をはじめとするいくつかのレポートをお読みいただきたい。そして、唐木氏が語る「インフオデミック」の状況を冷静に自らの目で見直してみる必要を感じる。それだけでなく、世界中の政府が犯した「リスク管理の原則」からの逸脱、そしてそれによってもたらされた歴史に記録されるような世界規模での経済的損失はあまりにも大きい。

最初のボタンの掛け違いがもたらしている混乱。しかし、EU各国の批判を受けながらも新型コロナウイルスを季節性インフルエンザと同等の扱いにしたスウェーデンを参考にすべきと唐木氏は指摘している。

こうしたリスク管理の混乱とそれによる情報の混乱は新型コロナウイルス問題に限らず、医薬、農業問題などでの意図的なデマを流す人々の存在を含めて冷静に批判されるべきである。